

4 質疑応答の概要

(1) 学校運営の現況説明

(2) 第1回運営諮問会議の各委員の意見に対する対応

(小松議長)

どうもありがとうございました。それでは、今の校長先生の説明に基づきまして少し質疑を行いたいと思いますが、最初に学校運営の現況報告をいただきましたが、これに関して何かご質問、ご意見がございましたら、お願いします。

大変いろんな活動をされているということをご報告いただきまして、外の方はなかなかわからないこともあるのではないかと思います。何でもよろしいですから出していただいて、議論をしていただければと思います。

(小松議長)

私からよろしいでしょうか。

JABEEのプログラムについてですが、どのくらいの先生方が参加してやっておられますか。

(校長)

プログラムごとで、40～50名ぐらいになります。基本的には、専攻科と本科4年と5年のプログラム全体が対象になりますので、当該プログラムに関係する学科の専門科目の教員は全員関係し、その他いわゆる一般教育部分の先生方もみな関係いたします。したがって、かなりの数の先生になります。三つのプログラムあわせれば、ほぼ全員に近い方たちになってまいります。そこでは連携をどのようにとっているのかということが課題として常に指摘されるわけでございます。専門学科とその基礎を担当するような、私どもは数理科と申しておりますが、数理科と一般教養科の教育とをうまくリンクさせていくことに留意しながら、関係者は全員参加するというところでやっております。

(小松議長)

技術者の倫理だとか新しい授業もありますが、それを学校内で全部やっておられるのですか。

(校長)

「技術者倫理」につきましては、私どもは5年生のカリキュラム科目として導入をいたしました。全員が、つまり5年で卒業する者もしっかりとした教育が受けられるようにということで実施しております。現状としては「技術者倫理」としてどういう内容の教育を、どのようにやったら一番いいのかということについて、まだまだ改善をしつつ、やっていかなければいけないところがございまして、現在のやり方は5名ぐらいの先生がチームを組み、いろいろな観点から取り上げる事例ごとに分担しつつ、5学科の学生が共通の教育を受けられるように実施しております。

(平田委員)

英語など外国語を学ぶにあたり、授業だけではなくて、実際に外国の人と会うとか、何か弁論大会をやるとか、応用的には何かありますか。

(校長)

3年目になりますけれども、外国人の英語の専任教員を採用しまして、その分5年生、3年生などのクラスを二つに分け、少人数教育でやっています。いわゆるコミュニケーション重視の、コミュニカティブな英語といいましょうか、そういうものを推進するというようなことです。それから TOEIC の試験を念頭において専攻科生などに対して補習教育を実施しています。また、本科の学生については校内の統一試験というのを1年から5年まで共通の問題で、英検の準2級程度の問題で実施しています。それぞれの学生が自分の客観的な能力が把握できるということと併せて、学校の教育成果としてどの辺が弱いのか、例えば語彙力について非常に不足しているのかなどチェックをして、教育を改善していこうということです。それから学生のコンテストみたいなことについては、この秋もちょうど新居浜でございますが、総合文化祭というのを四国6高専の共同事業としてやっております、その中で英語スピーチコンテストを行っています。校内でも ESS のクラブを中心に、いろんな活動が展開できればいいのかな、と思っております。

(庭野委員)

学習環境の整備のお話の中で、e-learning をいろいろ工夫されて、なかにその立案企画能力、プレゼンテーション能力を上げるというようなお話になったと思うのですが、前回もちょっと感じたのですが、ミニロボコンとか、自ら企画するようところに実際の授業でも力を入れられているところに、ちょっと疑問に思いますのは、その e-learning みたいなものでこういうのが身に付くのだろうかという、どういう工夫をされているのかなというところです。

(校長)

実はこれはこれから12高専で作ってみようということなのですね。そのベースになっていますのはプログラミングコンテストなどの蓄積です。高専のプログラミングコンテストは、単に競うというよりは、プレゼンなりデモンストレーションを組み込んで入っております、そこは各学校の学生が、どのようなステップをとって、プログラムを完成させたかなど、いわば埋もれたソフトやノウハウがいっぱいあるわけですね。そういうものを少し整理しながら、教材として提供して、学生にも自らやらせてみる。各高専が同じプログラムでやれば、高専ごとにまた競い合えるのじゃないかというようなことですね。また成果物をお互いに活用できるじゃないかというちょっと欲張りな計画でございます。これをやったら他はいらぬということじゃなくて、e-learning の可能性として、いわゆる高専の教育実践の成果を、お互いうまく共有化し、活用できないかということで、始まっているということでございまして、来年、再来年ぐらいには、少しばかりは成果をご報告できるかと思えます。

(鈴木代理)

ご説明いただいたインキュベーションラボのことですが、これは校内だけのことなのでしょうか。例えばあとから出てくるのかもわからないですが、地域との関わりなんかは考えておられるのでしょうか。

(事務部長)

このインキュベーションラボにつきましては研究エリアをバイオ、マテリアル、エレクトロと三つにゾーニングをしました。主として共同研究を一層促進しようという狙いが一点目でございます。それから学内における横断的な研究を学内共同研究として展開してい

こうというのが二つ目のねらいです。三点目は先ほど愛テクフォーラムのご説明を申し上げましたが、研究部会の中から愛テクフォーラムの会員の方々と萌芽的な研究などを、共に展開していこうということでございます。以上のような多様な使い方ができるように、ということで考えたものでございます。

(小松議長)

よろしいでしょうか。それでは、また後ほどいろんな面からの議論をしたいと思いますので、ここではこの辺にいたしまして、次に入学志願者の確保方策について桑田教務主事からご説明をいただきたいと思います。

(3) 入学志願者の確保方策について

(小松議長)

どうもありがとうございました。それではただいま説明していただいた内容に基づいて少し質疑応答、議論をいたしたいと思います。何か質問ございましたらどうぞ。

(田中委員)

重点地区になっております松山市で中学校の校長をしております。本校の卒業生も1名お世話になっているのですけれども、質問といいますか、ものづくりフェスタの説明に本校へ8月の10日に来ていただいたと思うのですけれども、よその学校へは、何日ぐらいから実施にあたり説明に訪問されたのでしょうか。

(桑田教務主事)

これにつきましては、今回が初めてであったこともあってPR時期が遅かったことは反省しております。準備の関係で10日前後2～3日で松山地区すべての中学校を回りました。

(田中委員)

夏休み中ですので、持ってきていただいても、なかなか生徒と会う機会がありませんので、もし来年度実施するのでしたら、できましたら夏休みの前に各学校へまわっていただいたほうがいろいろな面で徹底をするのではなかろうかと思います。これ一点、そういう風に感じました。

(桑田教務主事)

ご指摘、ありがとうございました。

(田中委員)

ちょっと38名では少ないかなと思ったりもしてですね。

(桑田教務主事)

来年度の実施に向けて検討していきたいと思います。どうもありがとうございました。

(岡田委員)

女性の生徒は今、何人ぐらいいらっしゃる、何%ぐらいでしょうか。

(桑田教務主事)

今、2割弱、180数名です。

(岡田委員)

10年ぐらいのスパンで見れば、やっぱり女性は増えているのですか。

(校長)

女子学生の数は平成 5・6 年ぐらいに急に増えた時期があります。それで 5 年ぐらい前に最大 200 人ぐらいになった時があります。つまりある時期急に増えまして、それから徐々に増えて、それから最近はそこからちょっと減ったぐらいの感じになっております。ですから、どんどんと増え続けているという感じは今ございません。

(岡田委員)

ちょっと門外漢なのであたっているかどうかわからないのですが、全然違うところからの意見という意味で言うと、生徒数が減るなかで、高専以外でも私立の高校も含めて、これからは生徒の奪い合いの時代になるというようなところもあって、いろいろな試み、一生懸命されているというふうに思うのですが、やっぱり抜本的に増やしていくというのは、なかなか大変なことだと思うのです。すぐというふうなことではないかもしれませんが、女性が男子と同じぐらい応募してくれたら、応募者は倍近くになるというところがあって、女性、女子生徒というコンセプトはどういうふうに考えて、今のこれまではおそらく男子も女子も特に区別せずに募集もするし、結果として 2 割ぐらいですか、入ってらっしゃるといことだと思うのですが。私も娘がおりまして、もう大学になっていますが、高校時代に私の娘の友達に理科系の女の子が多くて、今の女の子はそんなに理科系が好きなのかと言ったら、女子は就職が大変だから、理科系に行ったほうがあとで就職が楽だということを考えて、理科系を選ぶ子が結構多いのだというような話を私の娘がしていたりしました。小松先生に伺ったほうがいいのかもかもしれませんが、おそらく愛媛大学などでも理科系の学部における女子の比率もどんどん上がっているのではないかなと思ったりもするのですが。高専のイメージっていうのがありますよね。なんとなくやっぱり油にまみれて、作業服着て男の子たちだけがやっている学校みたいなイメージがあるのではないかなという気もしてですね。男女共同参画ではないのですが、女性がもっとももっとこういう物づくりの現場に出て、入ってきても不思議じゃないし、そのほうが新しい発想もあるかもしれないという視点もあるかもしれない。そのことも含めて、少し意識して女性という視点を。まあそうはいっても、なかなか親御さんが寮に出すかどうかという問題もあるかもしれませんが、あるいは寮にしても学内にしてもですね、女性のトイレから始まってですね、女の子たちが、暮らしやすい学校だなと思うかどうかというような、そういう設備面のことも必要かもしれないのですが、これから少し先のことまで考えたときに、女子生徒という視点もあるかなと思うのですが、これは現状、私わかりませんので、今いる生徒さんはやっぱり女の子は今ひとつ、入ってきても今ひとつなんだよね、というようなこともおありなのかどうか、わかりませんが、検討してもいい一つの視点かなとは思ったのです。

(桑田教務主事)

はい、ありがとうございます。確かに今 2 割弱ですから、50% ぐらいの比率になれば中学生の女子人口が多いというのでよくわかるのですが、実際には出口の問題があります。景気のいいバブル時代だといくら入ってきても「就職先は十分にあります」と言えるのですが、現状どうかという表向きは男女不問という求人票が多いのですが、実際には企業側にとっては男の子が欲しいという率のほうが高いのが事実です。そういった意味では、出口の開拓ができていないのが現状です。たとえば、「出口では女性のほうが有利ですよ」というような状況がつかれると、非常に PR もしやすと思います。実際には非常に難

しいと思われます。確かに検討していく項目の一つとは思いますが、どうもありがとうございます。

(校長)

もう少しその話させていただきます。本校では女子寮というのが実は長くありませんでした。それで平成 15 年に全寮制でなくなって余裕のあった男子寮の一棟を女子寮に改修しました。60 名ほどの女子学生が入れる、最新設備の快適な女子寮を設置しました。ちょっとまだその辺の PR が不足しているのかもわかりません。他の高専などで女子寮を整備したけど女子寮生が増加して足りない状況の学校もございますので、安心して預けられる女子寮をどのように運営確保するかということにも努めて、実績を PR ということも必要ですね。結局、中学を卒業したての子供を遠隔地に送ることに対して、保護者の方はかなり心理的な壁が高いのですね。だからこそ私たちとして、その心理的な壁を乗り越えるだけの魅力をちゃんと発信していく必要があるという気がいたしております。あと一つ悩みの種としては教員ですね。女子の教員が非常に少ないということがございます。今 3 名、84~85 名のうち 3 名ということでございまして、これは教員採用に際し、別に差別しているわけじゃなくて、採用は公募でやっておりますけれども、どうしても応募いただける女子の研究者の数が非常に少ない。これは国家的な問題になっているのですけれども、いずれにしても意欲のある女子学生に是非この高専に来て学んで欲しいという気持ちは変わりませんので、いろいろな面で考えていきたいと思っております。イメージとして高専はちょっと男っぽいという感じは確かに今でもあるのだと思っております。

(小松議長)

私の印象では、分野によるのではないかと思います。例えば、愛媛大学の理学部でも生物や化学は女子学生が非常に多くなっています。しかし物理、数学や地学などは少ないのです。農学部でも女子学生が多いのですが、生物や生き物を扱っているところは人気があるのです。ですから分野によるので、バイオテクノロジーや生命科学などは女子学生に魅力的ではないかと思います。ですから高専一般ではなく、ある分野をアピールして、そこへということとは可能ではないかなという感じはします。女子学生はだんだん増えていますが、やはり文系が圧倒的に多いです。教育学部や文科系の学部は半分以上が女子学生ですから、そういう傾向はあります。私の印象では高専はどういう技術者に育てるのかということが一番問われているような気がします。ですから例えば四年制の大学、工学部を卒業した学生と何が違うのかということが一番問われている。時代は変わってきましたから、そういう高専の学生が求められた時代と現在では、同じような主張ができないのではないかと思います。その辺が今、一番大きく問われていることかなという印象を受けました。ですからアドミッション・ポリシーにありましたが、物づくりが好きだと技術者になる、世界に通用する技術者になると。これは四年制の工学部のポリシーと何が違うかなという印象を受けましたね。その辺が中学生に訴えるときに、一番肝心なところかなという感じがしました。

(校長)

高専の技術者教育の特質を言葉でどうやって表現するかというところが非常に悩みなのですね。ですから中学生に学校に来てもらって、いろいろ見てもらって、やってもらってと、どうも今はそういう手法に頼っているわけです。小中学生向けのいろんなイベントをやって、来てもらうようなことになっているのは事実でございますね。言葉として、理

念としてしっかりとしたものを持ち、中学生の保護者の方にもわかりやすい形で、発信できるようにするというのは、確かに大きな課題だと思っております。結局、高専自体、卒業後の進路が非常に多様なものになってきていますので、昔のように5年間たったら就職するというのではなくて、進学を希望するという子も受け入れますよと。就職する子もですね、ちゃんとした即戦力というか実践力をつけて出しますよとか。いわば、理科の好きな子ならどんな子でも来てくださいますよと。ところがちょっと出てきていますので、その辺のところをどうイメージをうまく作っていくのかということがあろうかと思えます。全国の55高専も見てまいりますとイメージの出し方が非常に違ってきています。極端な学校はほとんど進学校じゃないかという風な実態もなっています。つまり、ほとんどの子はみな大学ないしは専攻科に進学しちゃうと。それで就職するのはほんのちょっとだという学校から。私どもの学校はどちらかというと、かなりクラシカルなタイプの6割が就職、4割弱が進学ということになっています。地元のニーズの動向をどう捉えてイメージを作っていくかということが広報戦略としてほんとに大切だと感じております。

それから先ほどの補足ということで、女子学生の数についてなんですが、学科によってすごく差があるじゃないかという小松先生のお話ですが、私の学校もまったくその通りでございまして、例えば機械などは女子学生が5年生まででたった4名しかいないと。一学年一人ずつという感じになります。ところが生物応用化学科は95名、各学年20人づつぐらいいる。つまり半分は女子学生ということになります。その他学科によって、いろいろ違いが出てまいりますので、その辺りは女子学生を確保しようとする時には、今の女子学生自身が持っている志向性といいたまいますかね、そういうものにやっぱり影響を受けざるを得ないなという面があります。客観的な事実としてですね。補足だけさせていただきます。

(小松議長)

ありがとうございました。

(桑田教務主事)

すみません。私の方から1つ訂正させていただきたいことがあります。先ほどの松山地区のフェスタの案内の件ですが、中学校に、1回目は7月の10日すぎに全中学校をまわりました。8月10日前後にまわったのは、応募者が少ないので2度目をまわったということでした。いずれにしてもちょっと夏休み直前だったということは問題だということは認識しておりますので、そこだけ訂正させていただきたいと思えます。私の勘違いでどうもすみませんでした。

(小松議長)

それではまた議論は後で続けることにいたしまして、ここで10分間休憩をとりたいと思います。よろしくお願いいたします。

(4) 地域との連携による教育活動の促進について

(小松議長)

どうもありがとうございました。いろんな活動が展開されているという話をお伺いいたしました。まず、何か質問がございましたらどうぞ。

(川崎高度技術教育研究センター長)

高度技術教育研究センター長の川崎でございます。地域貢献としての取り組みについて、桑田先生から説明がありましたが、2、3 補足させていただきます。まず公開講座でございますが、「愛テクフォーラム」が発足しております、実施項目として技術講習会を掲げております。企画して進めていきたいと考えているところでございます。それから出前講座でございますが、これは講義形式ということで、演示実験や卓上実験を含んでいますが、実習はありません。ですからこれをさらに発展させて、実習ということで学生が参加していくことが一つの方策ではないかというふうに考えております。それから、この出前講座について、この10月の最初に新居浜市役所様のほうに伺いましてお願いしましたところ、小学校・中学校・公民館など、市内に周知していただけるということで、ご協力いただいております。また市民への広報の面でもご協力いただけるということでございます。早速、市内の小学校から電気の教員に申し込みがございました。そういう状況でございます。以上、補足させていただきました。

(小松議長)

どうもありがとうございました。何かご質問ございましたらどうぞ。

(庭野委員)

インターンシップ制度の話でございますが、私どもは受け入れる側の企業としての立場なんですけれども、毎回悩みますのが、二点ございまして、一つは秘密保持、もう一つが安全の問題なのです。私ども化学産業ですから、やっぱりいろんな作業を見てもどこかしら危ない、それから薬品の問題が生じまして、来ていただいた学生さんに怪我させてはいけないというのがまず最初に出てきます。それともう一つは守秘で、私どもの研究でございますので、どちらにしろやっていただくのは特許処理のされていない部分について、二週間ですと簡単な実験ぐらいになってしまうのですけれども、していただいた結果をどうしても学校で発表されることになりますね。それは学内で収まればということではあるのですが、やはり企業側としてそれが非常に気になりますものですから。あまりそういう問題がないテーマを選びますと、先ほど言われたようなアルバイト作業みたいところに陥る傾向にややございます。私ども最近、不適の評価になっているかもしれませんが、そこは悩みでございます。なんかそこはいい手立てがあればと思うのですけれども。質問というよりか、私どもの悩みと考慮いただければと思います。もう一点は卒研の問題でございます。教員の手伝いになってしまっていると言われましたけれども、先生のある目的の中でその一部をやるという手伝いでしたら、非常によろしいのじゃないかと思っています。小松先生に怒られるかもしれませんが、大学でも今、修士レベルまではみなそんなものかなというイメージを持ってまして。やはり大学の先生も競争の中で、成果を挙げなくてはいけないということで、学生さんにはかなり固まった指示をしたかたちでやっておられるようなところがありますので、練習実験じゃなければそういう先生の一番やりたいことを手伝うという研究でいいのではないかなというふうに私には思えます。

ちょっとそういう印象です。

(桑田教務主事)

卒業研究の件ですが、教員の手伝いという意味は、要するにデータをとるだけで終わってしまわないようにということで、その学生にとって最低限意義があるようなものにするということです。題材としては教員研究でいいというように思っているのですが、単に作業的に終わってしまって、何をやったかわからない、ただメモしてグラフ書いて終わったとかいうようなことではだめだということです。それとインターンシップに関しましては、確かに守秘義務に関わる問題があります。現在は守秘義務的なことの確認をした上で報告書を冊子にまとめております。この冊子はインターンシップ先にはすべてお配りしておりますので、そこに書かれてあることはすべて、各受け入れ企業間の間での情報漏えいにつながる点があります。学生にはできるだけ、報告書に書く内容については了承をとっておくことを指導しております。確かにそういった、いいインターンシップをやろうとすればするほど、秘密関係とは裏腹な関係にあるということはおわかっております。そういった点はよくわかるのですが、だからインターンシップを受け入れないということではなくて、ご協力が得られるような体制をとっていきたいと思います。そういったことでいい対策法がありましたらご提案をお願いします。また、事前の安全講習につきましてはすぐに対応できようかと思っております。先の守秘義務につきましては、本校だけでは対応できない点があると思っております。その意味でも受け入れ機関との事前の打ち合わせが必要ということを感じております。以上です。

(早瀬専攻科長)

専攻科長の早瀬と申します。先ほどの守秘義務の件なんですけれども、シニアインターンシップのほうでも、報告会の前には受け入れ企業さんのほうに、こういう内容で発表しますということで確認を取って、一応発表するようにはしております。ただ学生との守秘義務契約というものを結んでおりませんので、あとはほんとに紳士協定になっています。また、学生にはノウハウ的なこと、特許になるようなことは口外するなよ、というか、あまり他のところでは言うなよ、という指導はしております。

(平田委員)

さっき、各種講座とか、ものづくりフェスタ、夏季体験学習等への学生さんの関わりを考えているのだというお話でしたので、自分の体験をちょっと話しておきます。新居浜工業高校へ市内のある団体の社長さんら 30 人ぐらいインターネットの勉強に何日か行ってもらいました。学生さんが毎晩 5~6 人ずつ付いているのですね、自主的に。先生は正面にいらっしゃるけれども、5~6 人が後ろに回りこんでくれまして、ほんとに文字通り手取り足取りね、手伝うわけです。その学生さんの態度がすごく爽やかで。結局その学校の評判になりましたね、すごくよかったです。だから是非学生には参加させてもらいたいなと思います。それからもう一つ、女子の問題も含めましてですね、出口の問題がありますということでしたけれども、卒業生をうまく利用して欲しい。私のように歳いった卒業生じゃなくて、この 4~5 年以内の卒業生です。たぶん学生さん自身も、どういうところへ行こうかな、といういろんな悩みがあるのですけれども、比較的若い方の卒業生というのは、中学生からみても身近なところなんですよね。そこら辺の卒業生が母校に帰ってきて、例えば社会に出たらこうなのだから今はこんな勉強をするべきよ、とかいうような講義をしてもらったり、なんとか便りに登場させたり、その辺を繋いでいくと、効果的じゃない

かと思う。うちの会社もですね、確かに工業化学、今は生物応用化学ですかね、そちらのほうのようなのは住友化学さんのような大きなところじゃないと、なかなか働き場がない。機械となったら男子じゃないと、みたいなのが確かにあります。力仕事だし、危ないし。ちょうどその間ぐらいが電子関係です。プログラムであるとかね。うちの会社も卒業生の女の子、女子社員でほんとにとことんもう任されてね、2年目ぐらいでいっぱいやっていますから。夜中までやっています。だからそういうようなのを、やりがいありますか、とかインタビューでも何でもいいからそれをフィードバックしてやる。そういう仕掛もどうでしょうか。以上です。

(小松議長)

私の印象ではいろんなことをやりすぎているのではないかと思います。うまく人を分担しないとオーバーワークになって大変だと思うのですが、いかがですか。その仕分けはできているのですか。

(桑田教務主事)

おっしゃる通りです。何か初めてやろうとすると、まずは一番の適任者で、やってくれる人をお願いせざるを得ないというのが現状です。そうしますと、どうしてもそういった人というのが偏ることがあります。2回目以降、うまく定着させていけば、学内での分担する人、対応する人が出てくれば、そういった偏りもある程度解消されると思うのですが、現状はおっしゃる通りです。このままで終わるとたぶんパンクして継続が難しいということがおこりかねないのはよく感じております。

(小松議長)

やはり、大学もそうなのですが、やる人がどこかに集中してしまうのです。それをうまくやらないと結局はだんだん衰退していくこと恐れがありますが、その辺はいかがですか。

(校長)

ちょっと角度が違うことになるかも知れないのですけれども、私どもの学校も専攻科生までいる学校に育ってまいりましてですね、専攻科に進みたい学生も増えているという現状がございます。それで、学生自身が学んだことを生かしているいろいろな活動ができる状況もできてきつつありますので、最近の言葉で言えばサービスラーニングということでしょうか、学生が地域に出て学んだことをうまく生かした社会的活動を展開し、それを学校としてうまく支援してやるということが、一つの課題と感じています。今年、私どもの学生の活動がたまたま愛媛新聞で紹介されて、私はこのことを新聞に出て初めて知って、うちの学生頑張っているなど思ったことがございました。お手元にあります本校に関連する新聞記事の中にも入れてあると思います。ある専攻科の学生が、夏休みに中学生を手伝いとして、地域で小学生にパソコンを教える。ワープロソフトで文章が書けるようにするとか、インターネットをどうやって使うかというようなことを高専の学生が中心にオーガナイズをしてやったということで、非常に喜ばれたと。これはその小学校区の少年愛護班に頼まれてやったということで、大きくとりあげられておりました。これ自体、学校側は全然関わってないのですよね。そういう動きを支援して、先生とうまく組み合わせてやっていくようなことは、学生にとっても非常にいい経験になるというふうにも感じますので、これも一つのこれからの新しい地域貢献の姿として捉えていきたいと思っています。

(鈴木代理)

地域貢献の方は、非常にたくさん貢献して頂いて感謝をしているのですけれども。入学

志願者の確保ですね、その中で卒業後の志がまだわからないというようなこととか、出前講座をやっているといわれることを参考にして、ちょっとヒントになるかもわかりませんので紹介したいと思うのですが。今日は住友化学さんがお見えになっていますが。住友化学さんの技術者の方が、定年近い方だったのですけれども、是非とも地域に貢献したいというようなお話がありまして、実はある小学校を紹介しました。一ヶ月に一回、わずか1時間のことなのですが、テーマを決めまして、今日は光の原則に関することですか、今度は動力の伝達に関することですか、をテーマを決めて子供たちにその実験をして教えてやるということを始めましたら、子供たちは非常に目を輝かして、喜んで参加をしているということを聞きました。今は1校だけではなくて3校ぐらいに広がっています。住友化学さんのご協力を得ています。そういうことができ始めると、例えば中学校だけじゃなくて、小学校のときからそういうふうに理科系のほうへ目を向けていくと思います。長期的にはなりますけれども、理系に進む人もたくさん出てくるのではないのでしょうか。この研究者の方が言っていましたけど、6年後に教えた子供に会って、先生に教えていただいたことで、私は理系に進むことに決めましたということを知って、非常にうれしかったということを言っていました。できることでありましたらそういうことで、小学生の頃から、そういう話をできるようにすれば、もっといい街になるのではないかなというような気がしたものですから、ご紹介だけさせていただきます。

(小松議長)

どうもありがとうございました。もう時間も迫ってまいりましたので、何か最後にございましたらお願いします。

学長会議などで学長が集まると、郵政民営化の次は国立大学だというような噂をするのです。私は高専は機構として一つにまとまったので、民営化しやすいのではないかと思います。高専予算をみますと、一高専あたり年間約16億円、全体で約800億円くらいです。これを、10年間で民営化するから整理しろと言ったら法案が通ると思います。それを避ける方法とはいうと、これは地元の支援しかない。地元が、高専をつぶされては困るという声しかないと思います。我々地方大学も同じなのです。ですから地元の企業のうち、8割以上は中小企業ですから、その地元企業の工業力、あるいは技術力をいかに高めるか、そこに高専がどのくらい貢献するのか最大の課題だと思います。就職をみると、新居浜に就職している学生は少ないようです。それは需要がないのか、あるいは高専の努力が足りないのかはわかりません。新居浜に限らず、愛媛地域の中小企業の技術力をいかに高めるかを最大の課題にして、技術力を支える若い技術者をつくることが最大のテーマではないかなと思います。そのためには、地域のニーズを常に把握してそれを学校の中に持ち込み、それを高めていくことが必要です。その結果、地域の人が支えてくれる。これは絶対つぶしてはだめだということにならないと非常に危険だと思います。我々の大学ももちろん同じです。そういう意味で多彩な活動をされておりますが、何か軸が少し足りないなとか、腰を据えるべきところが少し欠けているのでは、という印象を受けました。非常に努力されていることはわかりますが、あえて厳しい言い方をすれば、このままでは持ちこたえられないという感じがします。そういう点で我々大学とお互いに切磋琢磨して連携しながら、やっていく必要があるのではないかと思います。ですから我々大学側は、もちろん足りないところがたくさんあるので、高専の方と一緒に、愛媛県の技術力をいかに高めていくかということと一緒にやっていきたいと思っています。私からも是非そういう点で

はよろしくご協力、ご支援を勉強しながらやっていきたいと思ひます。

(校長)

せっかくですから、西岡委員さんに地元の企業として何か注文がございましたら、ちょっと発言いただいて、最後に私の方からお礼を兼ねてご挨拶させていただきます。

(西岡代理)

西岡鉄工所ですけれども、地元の産業界とすれば、やっぱり高専の生徒、昔の考え方からすると、現場の技術者で将来、会社の中核を担ってほしいと、そういう人が欲しいと、そういうことだろうと思うのです。けれども、このところやはり、高専を出て就職する人よりも大学に行ってしまう人の方が多いと、そういうような話も聞きますし、先生らは大学へ行くのを勧めとんじやないか、というような話も仲間うちでは出るので。そういうことで会社、地元の産業界も魅力を増やすということももちろん大事ですけれども、インターンシップなども通じて、また地元との連携を進めていってもらいたいと、そう思ひます。

(校長)

では、私の方からお礼も兼ねて一言。小松先生から大変激励をいただきました。やはり高専の使命というの、創造的、実践的な技術者を世に送ることとございまして、そのことをやりとげることが、高専の社会的な存在を多くの方から支持いただけることにつながるという気持ちで教育に専心してきたことは間違いないわけでございまして。ただ、これだけ時代が変わってきておりますので、従来の通りの教育をしていけばいいということはないわけでございまして、時代にあった教育を実際にどうやっていくのかということの方が大切だと思っております。今日は直接、そういうテーマではご報告、ご審議をいただかなかったわけでございましてけれども、またいつかそのようなテーマを設定して、いろいろなご意見をいただきたいと思っております。また、地域において新しい産業創出につながるような活動について、高専がどれだけの貢献をしているのか、可能性を持っているのかということについても、現状を報告して、ご意見いただきたいというふうに思っております。本科の卒業生のだいたい4割程度が県内就職ということになっておるわけでございまして。どこの企業さんからも、もっと就職をさせてくれ、という話をお伺いすることがございまして。高専生がなにも大きな企業で小さな歯車になることだけを目指して教育しているわけではございまして、地域の企業の方でも、やはり新しい産業を起こすような、活力ある企業等ですね、是非そういう経営もしていただきながら、私どもがそれにお役に立てるように、教育をしていきたいというふうに思っております。

それで最後に重ね重ねのお願いで恐縮でございまして、本日の非常に限られた時間、また資料を予めお送りしてないかたちでの会議で、大変失礼をいたしておるわけでございまして、お手元にメモの用意をさせていただいておりますので、十分お話いただけなかった点について、後ほどFAXで、できれば2週間程度の間にお送りいただくと幸いです。それをまた、学校で検討いたして、次回、今日いただいたご意見にそれを含めて学校としての対応状況をご報告させていただきたいと思っております。それからお手元の資料でございまして、二つ用意しております、ちょっと非常に大部なもので申し訳ないのですが、基礎的な資料と今回のテーマの直接的に関係するものになっております。お差し支えなければお持ちいただいて、お目通しをいただくと幸いに存ずるわけでございまして。ほんとに本日は大変お忙しい中、ご出席いただき、貴重なご意見をたくさんいただ

きましたこと、重ねてお礼申し上げます、ご挨拶とさせていただきます。

(小松議長)

それではこれで終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

